

デューク・エリントン・ライヴ・アット・ニューポート'59  
DUKE ELLINGTON LIVE AT THE NEWPORT JAZZ FESTIVAL '59

# DUKE ELLINGTON LIVE!

デューク・エリントン・オーケストラ: DUKE ELLINGTON AND HIS ORCHESTRA

デューク・エリントン(p)	DUKE ELLINGTON
キャット・アンダーライン(tp)	CAT ANDERSON
ハロルド・ベイカー(tp)	HAROLD BAKER
ファッツ・フォード(tp)	FATS FORD
レイ・ナス(tp)	RAY NANCE
クラーク・テリー(tp)	CLARK TERRY
ブリット・ウッドマン(tb)	BRITT WOODMAN
クエンティン・ジャクソン(tb)	QUENTIN JACKSON
ジョン・サンダース(tb)	JOHN SANDERS
ジミー・ハミルトン(cl, ts)	JIMMY HAMILTON
ラッセル・プロコープ(cl, as, whistle)	RUSSELL PROCOPE
ポール・ゴンザルヴェス(ts)	PAUL GONZALVES
ジョニー・ホッジス(as)	JOHNNY HODGES
ハリー・カーネイ(bs)	HARRY CARNEY
ジミー・ウッド(b)	JIMMY WOODE
ジミー・ジョンソン(ds)	JIMMY JOHNSON
サム・ウッドヤード(ds)	SAM WOODYARD

- ① A列車で行こう(テーマ) 0:30  
TAKE THE "A" TRAIN (Strayhorn)

- ② イディオム'59\* 14:13  
"IDIOM '59" (Ellington)

- ③ ロッキン・イン・リズム 3:50  
ROCKIN' IN RHYTHM (Ellington-Mills-Corney)

- ④ フラーティバード 2:40  
FLURTIBIRD (Ellington)

- ⑤ パーディド 4:17  
PERDIDO (Tizoli)

- ⑥ コップアウト 9:58  
COP-OUT (Ellington)

- ⑦ VIPブギー 3:27  
V.I.P.'S BOOGIE (Ellington)

- ⑧ ジャム・ウィズ・サム 3:41  
JAM WITH SAM (Ellington)

- ⑨ スキン・ディープ 8:55  
SKIN DEEP (Bellson)

- ⑩ 昔は良かったね 3:43  
THINGS AINT WHAT THEY USED TO BE (Ellington)

- ⑪ ジョーンズ 7:11  
JONES (Ellington-Reddon)

\*59年度ニューポート・ジャズ祭のために特別に作曲された組曲



デューク・エリントン・オーケストラ  
DUKE ELLINGTON AND HIS ORCHESTRA

1959年7月4日ニューポート・ジャズ祭で実況録音  
Recorded Live At The Newport Jazz Festival, Newport, R.I., July 4, 1959.

アルバム・プロデュース: 津山紀芳  
Album Produced by Kiyoshi "Boxman" Koyama

Released under permission of Mercer Ellington & George Wein (President: Festival Productions, Inc.)

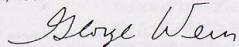
Digital Transfer: Alan Silver  
Mastering & Editing Engineer: Kiyoshi Tokiwa  
Cover photo: David Tan  
Liner Notes: Moshisaka Segawa & Shiochi Yui  
Special Thanks to: Charles Bourgeois, Ruth Alexander.

This year marks my 40th anniversary as a jazz producer. We're also celebrating the 35th anniversary of the Newport Jazz Festival—now the JVC Jazz Festival—Newport.

I am very pleased to note that the recording "Duke Ellington Live at the Newport Jazz Festival '59" is being released not only in our year of celebration but also in the year of Ellington's 90th birthday.

I still remember vividly that July 4th, 1959 performance by the Duke Ellington Orchestra. Some thirty years later, it remains one of the greatest moments in the history of the Newport Jazz Festival. I'm happy that with the release of this recording we will be able to share this memorable concert with many Ellington fans around the world.

June 21, 1989



George T. Wein

President: Festival Productions, Inc.

私がジャズ・プロデューサーとしての仕事をするようになってから、今年で40周年になる。いっぽう、ニューポート・ジャズ・フェスティヴァル(今はJVCジャズ・フェスティヴァル・ニューポートと名を変えているが)のほうも、今年で35周年を迎えた。

そうした記念すべき年——しかも今年は、デューク・エリントンの生誕90周年にもあたっている——に、「デューク・エリントン・ライヴ・アット・ニューポート・フェスティヴァル'59」が発売されることは、慶ばしいかぎりだ。

私はいまでも、あの1959年7月4日のデューク・エリントン楽団の演奏を鮮明に覚えている。あれから、30年という月日が過ぎ去ろうとしている現在なお、あの日の演奏はニューポート・ジャズ・フェスティヴァルの歴史におけるもっとも偉大な瞬間のひとつとして、私達の記憶に刻まれているのだ。

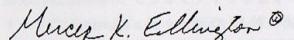
今回当時の録音が発売されることによって、あの忘れ得ぬコンサートの真実を世界中のエリントン・ファンと分ち合えるようになったことを喜びたい。

ジョージ・ウエイン

I think it is appropriate to celebrate Duke Ellington's 90th birthday with the album "Ellington Live at Newport '59."

This performance has never previously been released, and I think it is historically significant. After thirty years, these recordings are important additions to the Ellington legacy.

I do hope that many Duke Ellington fans, upon hearing "Ellington Live at Newport '59," will share my feelings.



Mercer Ellington

マーサー・エリントン

デューク・エリントンの生誕90周年を祝うにあたって、この『エリントン・ライヴ・アット・ニューポート'59』は、まさに打ってつけの企画と思われます。

これまでまったく未発表だった演奏ですが、歴史的にも大変大きな意義を持っていると思います。そして録音から30年を経たいま、このレコーディングはエリントンの遺産目録に貴重な1ページを付け加えるものと信じております。

エリントン・ファンの皆様にぜひこの『エリントン・ライヴ・アット・ニューポート'59』をお聴き戴き、このレコーディングから私が受けた感動を共有していただければ幸いです。

## スター・プレイヤーをフルに活用した エリントン楽団の白熱のライヴ

1954年夏以来、ロード・アイランド州ニューポートで催されていたジョージ・ウェイン主宰のジャズ・フェスティヴァルは、既に名声を確保しながら暫く人気の榜外にあつたアーティストを、一夜にしてカムバックさせる奇蹟を何度か実現させたのであった。映画「真夏の夜のジャズ」に登場した'58年度のアニタ・オディ、マヘリア・ジャクソンもその例であるが、'55年にはマイルス・デイヴィスがこのステージでの好演を認められ、レギュラー・クインテットの結成とCBSコロムビアへの移籍を実現したのであった。また'56年には、40年代後半以降人気低迷期にあつたデューク・エリントン・オーケストラがこのステージから偉大なカムバックを果たしたのであった。

1989年——デューク・エリントンの生誕90周年と、ジョージ・ウェインのジャズ・プロデューサー生活40周年を記念して、ウェイン氏秘蔵の'59年ニューポートに於けるライヴ・レコーディングが日本フォノグラムの手によって、初公開されたことは、世界のエリ

ントン・ファンを驚喜させる出来事となることであろう。

'40年代はじめのエリントン・オーケストラを飾ったスターたち……ケーティ・ウイリアムス、トリッキー・サム・ナントン、ベン・ウェブスター、ジミー・プラントンらはもはやここに居ないが、常にその時々の持ち物をフルに活用してエリントン芸術をつくりあげてきたデュークの才能にはみじんの衰えもみられない。

この前後のエリントン楽団のうごきは次のようになっていた。この年の6月、オーケストラはオット・プレミンジャー演出の映画「ある殺人(Anatomy of a Murder)」のサントラ音楽をハリウッドで吹きこんだ。またフェスティヴァルのあと8月初めシカゴでニューポートでの曲目を中心にレコーディングしたがこれはオクラにして、9月8日ほとんどのCDとおなじ曲目をCBSに吹込み、これは「フェスティヴァル・セッション」(CS8200)として発売された。このCDからは除かれているがニューポート出演を含み、この時期バンドには歌手としてジミー・ラッシングが同行して歌っていたのであった。

サックス陣では、ジョニー・ホッジ、ジミー・ハミルトン、ラッセル・プロコープ、ボール・ゴンザルヴェス、ハリー・カーネイ

が百万ドル・サックス・セッションを形成していたし、トロンボーンはトリッキー・サム・ナントンのワーカー・スタイルを継承するケンティン・バター・ジャクソンとモダンとスイングの双方に腕の立つブリット・ウッドマンがいた。

なかでも興味をそそられるのが、トランペット・セクションだ。

ハロルド“ショーティ”ベイカー(1914年5月生まれ)と、クラーク・テリー(1920年12月生まれ)は故郷が同じセントルイスで、よき先輩と後輩同志である。

以前ある記者が「セシル・テイラー、オーネット・コールマンといったアバンギャルド・ミュージシャンについてどう思うか?」とたずねた時、エリントンは毅然と「いかなる作品を作ろうともそれは音楽としての権利である」と答えたエリントンは、いったん雇い入れたメンバーは、当人がやめるといい出すまで決してエリントンの方からやめさせないとでも知っていた。クラーク・テリーの場合はその適例といえるかもしれない。

おごとわりておくがクラーク・テリーは現存するジャズ・トランペット奏者の最右翼に位置する名手である。

にもかかわらずこのCDにさくクラーク・テリーをフィーチュアした《バーディド》は、

最もエリントンらしくない《バーディド》に仕上ったように思う。クラーク・テリーが個性を發揮すればするほど、エリントン臭が薄れてゆくのである。

これをクラーク・テリー、レイ・ナンスを除いて他の3人が交互にソロをとる《ジャム・ウィズ・サム》と比較すると、《バーディド》に於けるクラーク・テリーの非エリントン性が明瞭となる。こちらの方のソロ・オーダーは、ゴンザルヴェス(ts)が出るまでのすべてハロルド“ショーティ”ベイカー。ブリット・ウッドマン(tb)、ラッセル・プロコープ(as)の次に出るのがキャット・アンダーソンで、ケンティン・ジャクソン(tb)の次がファッツ・フォード。そして再びキャット・アンダーソンが登場して高音でしめくくっている。

「クラーク・テリーはエリントン音楽にそれまでになかった新鮮味を注入した」という考え方が出来ぬわけではないが、古今のエリントン音楽を聴き通してみると、クラーク・テリーのいた時期とルイ・ベルソン(ds)のいた時期のこのオーケストラには、一貫した流れを断ち切った面白さがあったように思うのである。

油井正一

## 最高に充実したエリントン楽団の ニューポート・ライヴ

ニューポート・ジャズ・フェスティヴァルといえば、映画「真夏の夜のジャズ」で美しい風光と共に紹介されて一躍世界中に知れわたったように、1950年代後半における大規模な野外のジャズ祭りの白眉であった。デューク・エリントン楽団は、このニューポート・ジャズ・フェスティヴァルと切っても切れぬ縁があり、エリントン楽団の白熱の演奏が、同フェスティヴァルのハイライトをなし、楽団の人気は絶大なものがあった。1956年7月7日ニューポート初出演において、《ディミニュエンド & クレッシェンド・イン・ブルー》のボール・ゴンザルベスのテナーの大ブローが満場の興奮をよび、《ニューポート・フェスティヴァル・スイート》という組曲と共に、CBSでレコード化された。翌57年は休んで58年7月3日ニューポートに再登場、ジェリー・マリガンをゲストに迎えるなどして好評を博し、59年7月4日にも、フェスティバルの目玉として1時間半に及ぶステージを展開した。この時の演奏は、実況録音されたものの何故か今日に至るまでリリースされ

ず、ちょうど30年を経て、「エリントン生誕90年」に当たる今年、ようやく陽の目を見ることになったものである。

この頃のエリントン楽団は、40年代前半のベン・ウェブスター～ジミー・プラントン時代と並んで、最も充実したメンバーと演奏水準を誇った黄金時代であった。トランペット5人、トロンボーン3人、サックス5人、リズム3人の正規メンバーはいずれも超一流のエリントニアーズが健在を誇り、更にこのフェスティバルのために、ドラマーをもう1人加えて、2台のドラムスを擁するという特別のプログラムが組まれている。

このCDには、当日のステージから11曲が選ばれているが、その大部分は、1940年代以降の作品で、モダン・ジャズのハード・バップ全盛の時期にふさわしく、リズムもアンサンブルもソロも、モダンに躍動する時代感覚が十分に表現されており、ジャズの歴史と共に発展した偉大なエリントン・サウンドの真髄を感じることが出来る。又各曲の冒頭に、エリントンの明快な声の曲目とソリスト紹介が入っているのも、ライヴのステージの目当てに見る思いで楽しい。

## 演奏曲目解説

おなじみの《A列車で行こう》のテーマで始まり、エリントンの例によって明快な司会で、新しい組曲《イディオム'59》を紹介する。

3部に分れたこの組曲、1部はスローなテンポでプラス群がテーマを奏し、クラリネットのジミー・ハミルトンがオブリガードをつける、第2部は早いテンポに変って、ハミルトンが独特の澄み切った音色で早いバッセージを吹きまくる。第3部もアップ・テンポで、クラーク・テリーのトランペットが、リズム陣だけをバックにスウィンギーな長いソロをとる。この曲は、ニューポートで初演されたあと、1959年9月8日、スタジオ録音されてCBSから発売された。

1931年に初吹込まれて演奏されてきたおなじみのジャンプ・ナンバー《ロッキン・イン・リズム》。急速調のサックス・ソロの厚味ある迫力が実に爽快で、中間部ラテン・リズムに変ってハミルトンのクラリネットがかめぐり、クエンティン・ジャクソンがワーウィー・ミュートのトロンボーン・ソロをとり、レイ・ナンス、ハロルド・ベイカーのト

ランベットが続く。

『フーティーバード』は、1959年のコロムビア映画「或る殺人」(Anatomy Of a Murder)の中の挿入曲として、この映画の音楽を担当したエリントンが作曲した。この映画は、日本でも封切られた殺人事件の法廷劇で、オッター・ブレミンジャー監督、ジェームス・スチュアート主演。エリントンは映画の音楽全部を担当し、自分も出演した。サウンドトラックの中から13曲を選んで1959年5月～6月にCBSに録音している。この曲は、スローナラッドで、全篇にジョニー・ホッジスのアルト・サックスがフィーチャーされる。

『パーティド』は、ジャム・セッションに欠かせぬ有名なナンバーで、初演は1942年1月21日、ベン・ウェブスターの豪放なテナー・ソロが有名。エリントンは、「多くのリクエストにこたえて」と紹介して、クラーク・テリーのトランペットにソロをとらせる。

『カップ・アウト』は、1957年1月21日に初吹込まれた新しい曲で、ニューポート・フェスティヴァルの人気者になったボール・ゴンザルヴェスのモダンでたくましいテナーが長いソロをとる。エリントン楽団は59年9月8日に《Cap-Out Extension》の名で再吹込している。

1951年5月10日にCBSに初吹込した当時

流行のブーゲー・ウーゲー・リズムのナンバー「VIPブギー」。エリントンは、これから2曲では、ハリー・カーネイのバリトン・サックスによる最低音部からキャット・アンダーソンのトランペットによる最高音部のソロをフィーチュアします、と紹介する。ここでは、ジミー・ハミルトンのクラリネットによる長いエンディングをデュークが10-9-8-7…とカウントするのが微笑ましい。

（ジャム・ウイズ・サム）も前曲と同じく1951年5月10日に初録音された急速調のナンバーでイントロからエンディングまで、次々とメンバーがパワフルなソロをきかせるジャム・セッション風になっている。ソロはハロルド・ベイカー(tp)、ポール・ゴンザルヴェス(ts)、ブリット・ウッドマン(tb)、ラッセル・プロコープ(as)、キャット・アンダーソン(tp)、ファッツ・フォード(tp)と続き、ラストは超ハイ・ノートでキャット・アンダーソンがしめくくっている。ここではデュークがソロイストを1人1人紹介しており、ありし日のエリントン楽団の勇姿が眼前に広がるようだ。（なお、エリントンはメンバー紹介でトランペッターのファッツ・フォード、「Fats」Andres Marenquito Ford、の名前は本名で呼びあげている。）

1951年にエリントン楽団に加入した白人モ

ダン・ドラマーのルイ・ベルソンが作曲したドラムスのショーン・ケース・ナンバー「スキン・ディープ」は、52年のシートル・コンサートで初演されて好評を博し、同年8月12日にCBSに初吹込された。ベルソンは、この他にもThe Hawk Talksというドラム・フィーチュアの曲も作り、そのパワフルなドラミングはエリントン楽団全体をモダンに活性化させる原動力となり、これらの作品は、次のドラマー、サム・ウッドヤードによって適切に引きつがれて、長くバンドをショー・アップする曲となった。デュークは「本日は2人のバーカッションを用意して初演致します」と紹介し、ゲストのジミー・ジョンソンが右手、サム・ウッドヤードが中央で、長いドラム合戦をくりひろげる。

この頃エリントン楽団は、バーカッションの多用化に関心を持ち、59年2月に、9人の打楽器奏者を加えて録音を試みるなどの実験を行っている。

『昔は良かったね』は1943年に映画「Cabin In The Sky」の中で、エリントン楽団が演奏したジャンプ曲で初吹込は、1945年7月30日『Time's A-Wastin』という題名でビクターに録音された。快適にドライヴするシャッフル調のブルースで、ジョニー・ホッジスのアルト・サックスの18番曲だった。

『ジョーンズ』は1958年4月2日に、CBSに初吹込された新作で、ラッセル・プロコープが口笛(Whistle)を吹き、ポール・ゴンザルヴェスのテナー・サックスに引きつぐ。エリントンのラストの語りも今となっては貴重だ。

1989年7月10日記 瀬川昌久

NOISE INFORMATION : This recording is taken from the original 1959 source material and therefore contains some evident tape flows such as distortion.  
《お断り》演奏の一部におきき苦しい個所がありますが、オリジナル・テープに起因するものですのでご了承下さい。

DUKE ELLINGTON AND HIS ORCHESTRA

DUKE ELLINGTON  
CAT ANDERSON  
HAROLD BAKER  
FATS FORD  
RAY NANCE  
CLARK TERRY  
BRITT WOODMAN  
QUENTIN JACKSON  
JOHN SANDERS  
JIMMY HAMILTON  
RUSSELL PROCOPE  
PAUL GONSALVES  
JOHNNY HODGES  
HARRY CARNEY  
JIMMY WOODE  
JIMMY JOHNSON  
SAM WOODYARD

ELLINGTON LIVE AT NEWPORT '59



Recorded Live at The Newport Jazz Festival, Newport, R.I., July 4, 1959.

Released under permission of Mercer Ellington &  
George Wein (President : Festival Productions, Inc.)

Album Produced by Kiyoshi "Boxman" Koyama



EJD-6

デューク・エリントン・ライヴ・アット・ニューポート'59  
DUKE ELLINGTON LIVE AT THE NEWPORT JAZZ FESTIVAL '59



デューク・エリントン・オーケストラ  
DUKE ELLINGTON AND HIS ORCHESTRA

1959年7月4日ニューポート・ジャズ祭で実況録音  
Recorded Live at The Newport Jazz Festival, Newport, R.I., July 4, 1959.

アルバム・プロデュース:児山紀芳  
Album Produced by Kiyoshi "Boxman" Koyama

Released under permission of Mercer Ellington &  
George Wein (President: Festival Productions, Inc.)

Digital Transfer: Alan Silver  
Mastering & Editing Engineer: Kiyoshi Tokiwa  
Cover photo: David Tan

Liner Notes: Masahisa Segawa & Shoichi Yui  
Special Thanks to: Charles Bourgeois, Ruth Alexander.



4 988011 317408

- ① A列車で行こう(テーマ) 0:30  
TAKE THE "A" TRAIN (Strayhorn)
- ② イディオム'59\* 14:13  
"IDIOM '59" (Ellington)
- ③ ロッキン・イン・リズム 3:50  
ROCKIN' IN RHYTHM (Ellington-Mills-Corney)
- ④ フラーティバード 2:40  
FLURTIBIRD (Ellington)
- ⑤ パーディド 4:17  
PERDIDO (Tizoli)
- ⑥ コップアウト 9:58  
COP-OUT (Ellington)
- ⑦ VIPブギー 3:27  
V.I.P.'S BOOGIE (Ellington)
- ⑧ ジャム・ウィズ・サム 3:41  
JAM WITH SAM (Ellington)
- ⑨ スキン・ディープ 8:55  
SKIN DEEP (Bellson)
- ⑩ 昔は良かったね 3:43  
THINGS AINT WHAT THEY USED TO BE (Ellington)
- ⑪ ジョーンズ 7:11  
JONES (Ellington-Reddon)

\*59年度ニューポート・ジャズ祭のために特別に作曲された組曲



EJD-6

ADD E+9.5

All rights reserved. Unauthorized copying, reproduction, hiring,  
lending, public performance and broadcasting prohibited.

Manufactured and Distributed by Nippon Phonogram Co., Ltd. Tokyo.  
Made in Japan, JASRAC

このCDは権利者の許諾なく賃貸業に使用することを禁じます。

また無断でテープその他に録音することは法律で禁じられています。

発売元 日本フォノグラム株式会社 税込定価 ¥3,008 (税抜価格¥2,920)